三菱みなとみらい技術館　シカクノフシギ展（2018年春）　プロフィールパネル原稿

立命館大学総合心理学部　北岡明佳

　20年くらい前までは、錯視といえば牧歌的な感じの幾何学的錯視（形の錯視）のことだったのですが、画像作成技術の進歩と同期して錯視研究も急発展した結果、派手な見栄えの錯視図形が激増しました。さらに50年もたてば落ち着くべきところに落ち着くと思いますが、今はまだ派手な錯視が目新しい状態ですので、シカクノフシギ展では派手な錯視作品を並べてみました。「蛇の回転」はフレーザー・ウィルコックス錯視という静止画が動いて見える錯視の最適化版の作品で、特定のパターンの方向（黒→青→白→黄→黒→・・・）に動いて見えます。なぜ動いて見えるのかについては、大きく分けて2種類の仮説（錯視的運動知覚をパーツの知覚の時間差による仮現運動として説明するものと、運動検出器そのものの誤動作として説明するもの）が提案されています。「ガンガゼ」は、中間輝度の背景上に白黒縞を描くと、何らかの眼球運動がトリガーとなって、縞模様の方向（白黒白黒の方向）に一瞬ガクッと動いて見える錯視です。画像の作り方はわかっていますが、そのメカニズムは謎のままです。



